

学習単位制度の現実と課題 大学評価研究所大会での報告の要旨

金子元久

筑波大学特命教授

[キーワード] 学習単位制、単位制、大学設置基準、単位制の実質化、大学教育改革

「単位制」は大学教育の根幹をなす制度だが、その性格については一般の大学教職員にも十分に理解されているとはいえない。しかも2022年の設置基準改正によって、単位制のあつかいは「柔軟化」されることになった。もう一方で単位制度はフィクションに過ぎず、その曖昧さが、日本の大学教育の中身の薄さの一因となっているという見方も多い。

単位制の制度としての構造とは何か、それが現在の日本の大学においてどのように実施されているのか、そしてそれを「実質化」するためには何が必要なのか。こうした問題を解明するために評価研究所の2023年度研究プロジェクトとして「単位制の今日的位相と単位制の実質化に関する調査研究部会」が作られ活動している。また単位制の現状と問題について全国の国公私立大学にアンケート調査を行った。その中間報告を評価研究所の大会で行った。

プログラム

2023年12月14日 14:00から17:00 オンライン

開会挨拶	植木俊哉 (大学評価研究所所長 東北大学)
趣旨説明	単位制の現実と実質化への課題 金子元久 (筑波大学)
発表	
1	学事暦とその動向 千田亮吉 (明治大学)
2	授業時間、成績、評価 中井邦佳 (立命館大学)
3	キャップ制、週複数回授業 森俊太 (静岡文化芸術大学)
4	学事暦・授業時間の多様化 立石明治 (筑波大学)

5	単位制度と高等教育	松坂顕範 (大学基準協会)
6	アメリカ・ヨーロッパとの比較	森利枝 (大学評価・学位授与機構) 深堀聡子 (九州大学)

研究の背景と目的

趣旨説明 (金子) の概要は以下のとおりである。

制度としての単位制

制度としての単位制はアメリカの1900年代初めにある。その特徴は学士に至る教育課程を、「授業科目」というモジュールに分解することによって、その集積として学士を定義することにある。そして各モジュールにおいて、授業と学生の投入する時間に着目して、この視点から授業科目を標準化する。

この操作によって、a) 授業科目を広い範囲から選択して組み合わせて学位を取得することが可能となり、b) 異なる教育機関での学習を積算することが可能となる一方で、c) 個別の授業科目についても一応の最低基準が設定されることになる。他方で、i) 学生の学習時間については直接の統制はできない、ii) 授業の質による学習成果の差異を反映できず、またiii) 学生の資質、学習動機をも勘案することができない。したがって、学修成果の評価としては不十分、という批判がある。

日本への導入

この制度は第2次大戦後の新制大学制度の創設とともに、その骨格をなすものとして124単位の履修が原則とされたのである。ただしその導入の段階で重要な行き違いが起こっている。一つは戦前の週1回の講義を中心とする授業科目が2単位 (100分) に相当すると

とらえられて、そのまま単位制の基盤となったことである。アメリカにおいて「コース」と呼ばれる授業科目は通常は一週に2、3回にわたって行われ、それに応じて単位数が割り当てられる、という実情は伝わらなかった。このため、単位制は多数の細分化された授業に直接に対応するものとして受け入れられたのである。

課題

さらに1960年代からの高等教育大衆化の過程では、教育環境が著しく悪化し、1単位に対して2時間の教室外学習が必要、という規定は著しく現実と乖離するようになった。授業時間としての辻褃を合わせたとしても、学生の自律的な学習という面においては著しく実態を欠く、という意味で、単位制度は空洞化した。この状況は現在に至るまで変わっていない。

分析・論点

さらに個別の論点について各委員が発表した。

授業時間・学事暦の現状と動向

まず単位制の具体的な要求である、授業時間のインプットの具体的なあらわれである、年間の学事暦および授業時間の現状と、その動向について、千田委員と中井委員が分析の結果を報告した。またこのプロジェクトで行ったアンケート調査をもとに、この視点からの日本大学の実需と動向について、立石委員が報告した。

単位制実質化の方向

学修の密度を上げるための方向として取り上げられる、週2回授業、および一学期あたりの登録授業数の

制限(キャップ制)の現状につて、森俊太委員が報告した。調査の結果によれば、週2回授業の事例は極めて少なく、またキャップ制は実効性を発揮していない。

単位制と教育政策、国際比較

日本における単位制が政策的にどのように変化してきたのか、という点について松坂委員が報告した。また森委員はアメリカにおける単位制の発生のメカニズムと、現代におけるその課題について述べた。深堀委員がヨーロッパにおいては、ヨーロッパ域内での学生交流の必要からヨーロッパ学習単位交換システム(ECTS)が作られ、それが学習単位制に相当する役割を果たしている現状を述べた。

報告書

上述の研究大会での発表で感じられたのは、さらに研究プログラム全体の問題意識を整理するとともに、各委員の分担する研究分野をさらに明確な問題意識をもとに整理していく必要があるという点である。それに従って現在、最終報告書の作成作業を行っている。

*このプロジェクトに伴って実施した全国大学への調査は、単位制に直接に関わる問題だけでなく、大学教育改革の様々な論点に関わるものであって、それだけでも大きな示唆を与えてくれる。ご協力をいただいた各大学に御礼申し上げます。単純集計表は大学基準協会ホームページに掲載されている。「単位制度の実質化に関するアンケート調査 粗集計結果 2023年11月」